江陽中

「自分の考えをもち、共に学び、深め合う生徒の育成」

～協働的に学ぶ場面の工夫～

（３年計画の１年次）

校長　　岩　舘　　昇

１　研究主題について

本校では以前八戸市学校保健会研究指定校として『ピアサポート活動』に数年間継続的に取り組んできた。この活動は，他者には言いづらい悩みや心配事がある時に，生徒同士という「気がねのない仲間」が相談にのったり，サポートしたりする『温かい関係づくり』を推進する取組だった。そして，この下地をもとに生徒自らが主体的に考え，発言する態度や意識を引き出すために，生徒同士のコミュニケーション能力の向上を目指して研究に取り組んできた。しかし，数年間続いたコロナ禍で授業での協働的な学びの場面が制限されることが多くなり，その結果，生徒同士がお互いの考えや学びを共有することが減少し，自らの考えに固執しがちになり深い学びに繋げることが難しくなった。そこで，昨年度の教育課程から本校生徒の課題として研究主題中の『共に学び』が特に必要と考え，話合いを通して自分の意見をしっかりと述べることや相手の立場を考え共感することの大切さを認識し，安心して自分の考えを述べ，仲間と認め合える集団の形成ができるようにする「ピアサポート活動」の精神に立ち返り，改めて取り組むこととした。また，生徒自身の思考の表現や，その発信・伝達手段の一つとしての効果的なＩＣＴの活用も本校の課題である。

以上のことから，協働的に学ぶ場面を多く取り入れることでコミュニケーション能力の向上による学びの深まりを目指していく。自分の意見が仲間に認められ，互いに磨かれる経験を積み重ねることにより，そのことが自信につながると考える。そして，それが共に学び，深め合う態度を更に強化することにつながり，一層の学力の定着・向上が図られると考え，本研究主題を設定した。

２　研究のねらい

「仲間と認め合い、支え合い、高め合う」ピアサポート活動の手法の見直しと学習活動への応用を図り、各教科や各領域において生徒が主体的に自分の考えや意見をもち、共に学び、深め合う学習へ　の意欲を高めるための活動や授業形態などについて実践を通して研究する。

３　研究仮説

授業の導入から課題設定の段階で生徒自身が自分なりの考えをもち，その解決のために協働的な学びの場面を多く取り入れ，生徒が相互にアウトプット作業を行えるような場面を授業に設定することで，基礎・基本の定着を図り，かつ自ら学びを深めることができる生徒の育成につながると考える。

４　研究内容

(1)　「学習六則」を徹底させる。また，取り組み状況を定期的，継続的に評価し，改善に努める。
(2)　各教科や各領域において，協働的な活動場面を効果的に設定する。
(3)　問題解決的な学習のための導入や課題設定を工夫する。
(4)　教員間の授業内共通理解項目を設定し，指導技術の向上を図る（相互授業参観の実施）。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	内　　容
４	５	第１回校内研修　　全体会（研究についての共通理解）
４	２６	第２回校内研修　　研究テーマ及び研修計画について
６	２８	第３回校内研修　　指導案の書き方の共通理解
７		相互参観授業　　一人一授業
１２		相互参観授業　　一人一授業
２	２１	第６回校内研修　　研修のまとめ（今年度の成果と課題）

(2) 一般研修

月	日	内　　容
７	２１	一般研修等支援「問題解決的な授業づくり」 八戸市教育委員会　教育指導課主任指導主事　馬渡　正仁様
１２	２２	第５回校内研修　防災教育・安全教育に関しての研修 避難所開設に関する共通理解等について 本校教頭　　佐々木　克昌

６　研究の成果

(1) 学習六則や指導上の共通事項を確認し、２年生では、毎時間、毎日教科担任に授業への取り組み状況を継続的に評価してもらい、改善に努めることができた。各教科の授業で教え合いや学び合い等の対話や意見交換の場面を積極的に取り入れることで、生徒対象の授業アンケート「対話や話合い活動を通して、お互いを尊重・受容する態度が向上したか」において１００％となり成果が認められた。

(2) 全校でリーダーの生徒を主体として、PSC 活動を行うことができた。生徒会を中心とした活動だけではなく、各生徒の強みを生かした活動を取り入れた。そのことで各学年単数学級という小規模校の強みを生かすことができ、上級生が下級生を指導する「縦の繋がり」をもつことができた。地域の方々を交えてのグループでの話合い活動の場で、PSC 活動の取組が発揮されて、生徒のコミュニケーション能力の成長を促すことができた。

７　研究の課題

新型コロナ感染から対話や協働作業が制限されることが多かった生徒の世代であり、学年によっては意見を交換しにくい雰囲気がある、発表のスキルがわからないなどの課題があったが、授業に繰り返し取り入れることで協働的な学びの場面の確保が実現するとともに、生徒の話合いのスキルが向上し、深い学びにつなげることができた。しかし、生徒１人１台端末の有効な活用法や授業形態について、特に個別最適化された学びの実現と、不登校生徒への有効的な活用方法については、更なる研修及び工夫が必要である。

（記入者　佐々木　信也）